

ずいそう

北京の空

窪内 萬幸



娘の結婚を機にアルバムを整理していると、30数年前の北京出張中の若き日の写真を見つけた。当時は日中国交正常化後、対中円借款が始まっており、インフラ関連の話が日中友好商社を介して数多く引き寄せられていた。当社にも以前からお付き合いのあった関西の友好商社から、「近く北京で作業船の技術交流会があるので参加しないか」と打診があり、急いで準備にかかることになった。1978年9月初め、社長以下船体、電気、機械、見積担当の総勢5名で臨むことになり、私は機械担当として参加することになった。出発に先立ち出張期間はどれくらいか誰もはっきりしたことが分からず、「多分9月末には帰れるだろう」と、みんな夏服姿で向かった。

9月11日、開港したばかりの成田空港を出発し北京空港に着くと、雲一つ無い青空が我々を迎えてくれた。ホテルは、故宮から近くの『民族飯店』が宿泊所となり、ここから交流相手である輸出入公司に通うことになっていた。

技術交流は翌日から友好的に始まったが、間もなく彼らが「タバコ」を私たちに投げて勧めるではないか。「何だこれは！」中国の流儀に先制パンチをくらってしまった。

交流も進んだある日、機械の作業能力を説明する中で、私が机上の理論値をいってしまった。相手側がこれを実際の能力として契約書に入れてほしいということになり当然、これを絶対受け入れることはできず話が進まなくなってしまった。何度か交渉を行いやっと分かってもらったが、私の説明不足で皆さんに大変迷惑をかけてしまった。

9月の終わり頃になると商談にも目途がつき帰国の準備をしていると、商社の担当者から「新しい機械の引き合いがあるので引き続き残ってほしい」と話があり、結局全員が残ることになった。次の技術交流に間に合わせるため自分たちで図面を作ることになり、T定規や製図板を買ってきてホテルで図面を描く毎日が続いた。

10月の中頃になると秋風とともに街路樹には紅葉が始まっていた。夏服では寒くてどうしようもないの

で、友誼商店（外国人向けデパート）に行き、セーターと人民服を買ってスーツ代わりに使った。

ある休日、北京の街にもだいたい慣れいつもの友誼商店に行くと、先輩が食品売り場に懐かしい「スルメ」を見つけた。「今日はこれを肴に一杯飲もう」ということになり、電熱ヒーターも買い込みさっそくホテルの部屋で焼いていると、用務員（男性）が血相をかえて怒鳴り込んでくるではないか（そのように見えた）。身振りからすると、どうも焼いた「スルメ」の臭いが強烈で隣の部屋から苦情が出たらしい。すぐに焼くのをやめたが悪知恵は働くもので、「ベランダは大丈夫だろう」と皿に入れた「マオタイ酒」を燃やし、あぶりながら食べた「スルメ」の味が忘れられない。

当時の北京はまだ外国人の姿が少なく、娯楽施設と言えば映画館（もちろん中国映画）か商店街や公園を散歩するぐらいで、商社員も長期滞在になるとかなりストレスがたまっていた。そのためかどうかわからないが、外国人向けに月に一度外国映画の上映があった。10月はめずらしく日本映画があり、それも「寅さん」の上映ということで、我々も久しぶりに心を癒すことができた。

北京滞在中は我々が退屈しているだろうと会社の先生方も気を使ってくれ、休日には北京故宮、万里の長城、頤和園、明の十三陵など有名な観光地に弁当持参で連れて行ってくれた。現在これらの施設は世界遺産に登録されているが、当時はまだ公衆トイレに「ドアがない」のは当たり前で、大用を足すにはかなりの勇気がいった。

技術交流も長期戦となったが、11月末になんとか5隻の契約がまとまり、やっと12月初めに帰国出来ることになった。3カ月近くの出張で貴重な経験をさせてもらった。翌年から順次納入を開始しその後、納入した作業船がインフラ事業に活躍したと聞いて少しは誇らしく思っている。その当時友好商社に勤めていた事務員が、今家で采配をとっている女房殿である。